令和３年度 第２回安曇野市博物館協議会　会議概要

１	会 議 名	令和３年度 第２回安曇野市博物館協議会
２	日　　時	令和３年 10 月 12 日　午前 10 時から午前 11 時 40 分まで
３	会　　場	安曇野市役所本庁舎　３階　会議室 301
４	委員出席者	保科委員、百瀬委員、細野委員、宇田川委員、須之部委員、金井委員、笹本委員、古川委員
５	事務局出席者	山下文化課長、豊科郷土博物館兼穂高郷土資料館原館長、豊科近代美術館荒深館長、田淵行男記念館兼飯沼飛行士記念館中田館長、穂高陶芸会館小倉館長、髙橋節郎記念美術館宮澤館長、貞享義民記念館寺島学芸員、臼井吉見文学館平沢館長、逸見博物館係長兼新市立博物館準備室長、幅博物館係主査兼新市立博物館準備室員、松田新市立博物館準備室員、倉石新市立博物館準備室員、三澤文化振興担当係長、塩原文化振興担当主査
６	公開・非公開の別	公開
７	傍聴人	１人
８	会議概要作成年月日	令和３年 10 月 30 日

協　議　事　項　等

○会議の概要

１　開　　会　（文化課長）

２　あいさつ

３　報告・協議

(1) 令和３年度各館事業報告及び令和４年度事業構想について（資料１）

委　　員　上半期印象に残った展示は、コンパクト展示の「困った生き物展」である。それぞれ、昔からいる生き物であるが、その中には困ったものもいる。例えばハチ、アナグマ、タヌキなど。外来種は『外来種は本当に悪者か』という書籍でも語られているように、駆除される種は多くの場合、世の中では悪者扱いだが、やんわりと考えさせられる展示だった。我々にとっての自然観のうち「人間にとって自然はどう大切か」、ということを匂わせるものだった。郷土博物館での展示と繋る内容で、田園の広がる安曇野で子どもたちにどう伝えるか、とても大事ではないか。

会　　長　多面的に考えられたいい展示だったと考える。広い視野から見ていこうという視点で、自然とも共存しながら博物館が動いていくというような色々な形で続けたい。

委　　員　シンビズム４は、長野県の事業との連携を図られ大変高く評価している。現代美術に対する働きかけとして今後に繋る内容であった。また、今年もコロナの影響で、博物館実習に出向けなかった学生に対してご支援いただけたことをお礼申し上げる。

事業計画の中で、豊科近代美術館の「土門拳展」は私も是非観に伺いたいし多くの方が観たいと思う企画ではあると思うが、安曇野市として、どう

みせていくのか、安曇野市との関連づけについてお考えを伺いたい。
また、穂高陶芸会館は作陶が体験できる施設としてとても充実した活動をされている。展示と制作の二つの利用者の統計が出ているが、展示と作陶いずれを前面に打ち出していかれるか、現時点でのお考えをお聞きしたい。

会　　長　シンビズム４は非常に面白い企画であったので、安曇野でそうした展覧会を開催してくれるのは嬉しいことである。博物館実習は多人数で出来ないため、半数しか受け入れられないが、それもプラスとマイナス両面がある。土門拳は荻原碌山の作品の写真も撮っており、地域との繋がりをどうみせていくかを伺いたい。また陶芸会館のあり方については展示、制作どちらが中心となっていくのがより良いのかを含めて考えてみたい。

事務局　信州大学の博物館実習生の受け入れについては私どもにとってもありがたいことである。館の方は展示の手伝いをしていただき、学生にとっては、外から見ていた美術館を内側から見ることによって印象が変わるという双方にとって良いことと考えている。
「土門拳展」については具体的な計画はこれからであるが、碌山の作品を撮った作品を加えるなどして他の巡回先とは異なる展示構成を考えている。

事務局　当館は作陶が収入のメインとなっている。展示の方は、穂高町時代に塩尻の洗馬の焼物を収蔵したが、地元での知名度が低く、来館者が少ないのは事実。ただ、展示の努力はしているつもりである。10 月には展示コーナーを使って友の会が展示を計画している。和室コーナーで「野点」で訪れた方向けに工夫している。

委　　員　作陶者を分けずに入館者として含めることで陶芸会館の有用性を内外にアピールするよう施設として意識して発信すべき。

会　　長　県立歴史館でも来館者が満足しているかが問題になる。入館者は増えていないが、図録が売れるということもある。市民の皆さんに説明する手法として何が大事かをしっかり考えたい。「土門拳展」開催にあたっては、碌山美術館、田淵行男記念館と連動する形で横に繋がりながら進められるようお願いしたい。

委　　員　子どもの遊びの中で、友達同士が刺激し合っていることが大事である。豊科郷土博物館の民具、昔からの生活、地域の衣食住に関する展示・イベントは関心を持って参加される方がいると思う。例えば電子機器、ハイテクも増えていて、日常生活の道具を通じて道具を知ることもあるのでは。我々にとってどういう物があったら良いのか？ということを新博物館構想にも入れられないか。

事務局　必要ならば検討はするが、ハイテクは安曇野市だけのものなのかは難しい問題である。安曇野市誌でも民俗編に取り掛かっているが、全国で同じことが拡がっている場合は、安曇野としてどう捉えるか、検討が必要である。

委　　員　ドローンが簡単に使用できることになったことで心配も増え、上高地では禁止されている。事故が起きないよう、学術的な視点からの棲み分けは必要である。

委　　員　郷土博物館の拾ヵ堰の展示が良かった。発見―展示―報道という流れが多くの入館者が呼んだのではないか。アンケートによれば、石碑に「沼っている」という中学生がいる。この中学生にとっては友達も親にも共感して貰えないことが、博物館に行くと共鳴してくれる人がいる、という体験は非常に大事になると思う。

会　　長　　展示すれば多くの方々が観に来てくれる。重要なものをきちんと見つけて展示することが大切である。博物館には何かに非常に長けていて興味がない人には理解できないが、「沼っている」人にはその人と話すのが楽しい、ということがある。博物館に専門家がいるというのは大事なこと。

委　　員　　土門拳は私も過去に個展にも行き、図録も持っているので、とても楽しみにしている。また、同じく来年度開催予定の日展安曇野展は、10 万人規模の市での開催は初めてということで、安曇野の名が全国に知られるまたと無いチャンスである。

20～30 代の方を見かけることが少ないが、若い世代が来る仕掛けは、例えば御朱印レディのように意外と古典的なものが好みだったりもする。

会　　長　　土門拳をはじめとして、博物館美術館に、色々な人たちが色々な方向性を持って来て見て貰うことを考えていきたい。

委　　員　　前回 5 月の協議会で博物館美術館に人を呼び込む仕掛けが必要、という議論があり、子どもが外に出ていく良い切っ掛けがないかと考えた。広島での平和学習が中止となってしまったので、常設展の巡回をやりたいと電話があった。ただ展示をしてもつまらないので、郷土博物館から安曇野の戦争に関わる資料を借り、原館長に座って貰って解説いただいた。平沢先生が校長の時にの掲げられた「知る」（１年）、「感じる」（２年）、「働きかける」（３年）のテーマについて、生徒が何かひとつのことをネットで調べて書いてしまう。いくうちに話を聞ける人に出会えることが大切。書物を読むよりも聞けて、分かる、という大事なチャンスを作ってあげたい。また、隣の碌山美術館では篠田守男展が始まり、校長先生の考えもあって、ワークショップに美術部が参加できた。全クラスの子が行けたらと考えている。現在他の美術館でも行われているような、今の人たちに合ったちょっとした仕掛けも必要ではないか。

会　　長　　色々な形で博物館が協力出来ることが分かった。碌山の《坑夫》が学校にあるというのは凄いこと。偶然あるのではなく、隣にあるからこそ連携して動いて貰いたい。

委　　員　　絵図を発見した立場からすると嬉しいお話である。一つの課題としては、新発見資料を、発見したが、マスコミの使い方が下手だった。プレスリリースが機能していなかったために外部発信ができなかったことなどが原因ではないか。文化財の保護という観点も大事だが、新発見資料をどう扱い、紹介していくか重要なことである。

会　　長　　どう広報するかは大変な問題だが、調査研究がどのようにして何のために行ったのか、を展示に繋げていることが良い。郷土博物館は植物、考古学、歴史、民俗と全国的に活躍して来た人たちがいるのは大変なこと。少ない人数で数多くの展示を行っている。展示回数を減らしながら、時間をかけて取り組めるようにして貰いたい。少人数でそれぞれ一生懸命、よくやってくれているのは稀有なことなので引き続きお願いしたい。

博物館、文書館、市誌編纂は関わり合っているがこれらについてご意見は。

委　　員　　西山の状況の打開策として、文化芸術、自然を観光資源とし、休業している民間施設を活用する案を一度練り直すことが、非常に重要な柱になるのではないか。新博物館構想が具体的に日の目を浴びることがあるかもしれないが、現状では課題も多く、中長期的展望として見ていく必要がある。豊科郷土博物館の老朽化、施設の不具合がごちゃ混ぜになっていると、解決にならない。提案を求められたら直ぐに答えられるよう案を用意していくことが大

事である。

会　　長　　新博物館準備室は建設に向けて協議会としても現状の説明はしていきたい。本来市民のお金で作るものは、市民が勉強するためにつくられるべきである。博物館は必要だと言い続け、前進するようにして貰いたい。

委　　員　　新しい市のあり方に、政策課題として挙げていただくためには、ミッションとして、ソーシャル・インクルージョン（社会的包摂）が見えてこないといけないのではないか。学校教育の成果、産業振興の上に行く、多様な形を束ねていく“社会的包摂”が大事なのではないか。

会　　長　　社会を作っていくこと、つまり“私って何だろう”と思うことが、安曇野市を良くしていく原動力となる。

委　　員　　企画の中に、その社会的包摂が含まれていることが、県や文化庁の助成金の応募の際には必要な項目にもなるので、考えて行くべきである。

会　　長　　公民館との連携が足りない。小さなミニ展示をやって、市の施設の目につきやすいものにしていくのは良いことだ。連動と言ってもやる側にとっては難しいのだが、図書館・博物館・美術館それぞれがやっていることで、皆で繋がっていきましょうという姿勢が大事である。

委　　員　　新博物館の方が建設する方向に進んでいるのかは不明確だが、ミュージアムがそれぞれの活動を包括していく施設が必要である、と言う時期が来ていると思う。新たに建てるよりも休業した民間施設の活用のシミュレーションを行うなど、代替案も必要ではないか。

会　　長　　塩尻の平出博物館は、市全体を扱っている。新博物館は市全体をどう扱うか、博物館にとっては良い状態でどう次に繋げていくかが一番大事。特に収蔵庫は大きな問題。博物館は必要だというスタンスで、今やっていることをきちんと位置付ける計画をすることが必要。

（2）そ の 他

4　閉　　会

以上

※会議概要は、原則として公開します。
※会議を非公開又は一部非公開とした場合は、その理由を記載してください。